

## 名古屋と観光

### ―歴史・文化・まちづくりからのまなざし

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 名誉教授 山田 明

多様な交流の促進と集客力の向上による観光の振興は、グローバル化と分権化が交錯する現代社会にあって、重要な政策課題のひとつである。これから紹介する「観光研究プロジェクト」は、人間文化研究所とともに歩んできた。

「人間・地域・共生」をキーワードにした研究所が一〇周年を迎えたことは、その設立に関わった一人として感慨深いものがある。研究所設立は、大学院人間文化研究科の立ち上げ、大学「法人化」の動きの中で推進されてきた。

二〇〇九年一月二八日に開催された研究所五周年記念シンポジウムでは、長野県泰阜村・松島貞治村長の「安心のむらは自律のむら」と題した記念講演に続き、「持続可能な社会」をテーマに、歴代の研究所長などによりパネルディスカッションを行った。現在、「地方創生」が声高に叫ばれるなか、松島村長の講演は今でも心に残り、その後の研究教

育の刺激となっている。

ここでは、人間文化研究所を中心に取り組んできた「観光研究プロジェクト」について時期を追って、研究教育の一端を紹介していきたい。

#### ◇総合科目「名古屋と観光」

大学「法人化」にあたり、名古屋市をはじめとして地域との連携を強めることも課題となった。連携を模索している中で、名古屋市民経済局から観光分野での「協力」依頼があった。名古屋や観光に関心のある教員らが協議して、とにかく「観光研究プロジェクト」を立ち上げることにした。大学院人間文化研究科・人文社会学部の特徴を活かし、人文社会学部の諸分野から観光と交流を学際的に調査研究し、その成果を発信することをめざした。

人文社会学部の講義として、名古屋の観光を対象にした科目を新設できないか検討を重ねた。その結果、「法人化」一年目の二〇〇六年後期



から、総合科目「名古屋の歴史・文化・まちづくりと観光」（略称「名古屋と観光」）を開講した。前期から講義準備のための研究会を何回か

行った。なお、二〇〇六年度に本学の「特別研究奨励費」の交付を受けることができ、研究所「共同研究プロジェクト」にも採択された。

講義は予想を大幅に超え、二〇一教室が超満員になるほど盛況であった。前年度から始まった授業公開制度により、二〇数名の社会人も熱心に受講した。講義担当者は専門を異にする六人の学部教員（講義順に吉田一彦・服部幸造・成田徹男・堀江孝司・阪井芳貴・山田明）、それに非常勤講師として招いたJ.R東海相談役の須田寛先生だ。とりわけ須田先生の「あつい講義」は好評であり、二〇一三年度まで八年間にわたり担当していただいた。名駅セントラルタワーズのJ.R東海本社に緊張して依頼に行ったことが、今も思い出される。

須田先生の講義・講演は二〇回余り聞いたが、観光の定義から始まることが多い。

観光の語源は中国の易経「観国之光」である。国の光を心をこめてみることで、ないしは見せることだ。古くから人的交流の促進は、為政者の任務とされてきた。観光はけっして単なる「遊び」ではない。観光は人と人とのふれあいであり、交流のなかで文化が発展することを考えれば、観光は文化事業なのだ。



二〇〇六年度の講義テーマを示しておく。「プロローグ」「名古屋の歴史」「名古屋の文化」「名古屋のことは」「名古屋の繁華街」「産業観光の現状と課題」「名古屋の伝統と新しい風」「名古屋のまちづくり」、最後に「フリーディスカッション」である。「フリーディスカッション」では、とりわけ聴講生から積極的な発言・提案が多く、学生も刺激を受けているようだった。

翌年三月には、講義ノートをもとに『名古屋の歴史・文化・まちづくりと観光』という七二ページの報告書を刊行した。報告書は特別奨励研究の成果をまとめたものだが、総合科目「名古屋と観光」の講義テキストを兼ねて編集した。二〇〇六年度「講義ノート」、講義や講演要旨、福岡市・太宰府市・横浜市の現地視察、観光レポート、名古屋の観光統計などから構成され、数年にわたり講義テキストとして活用した。なお、この報告書の編集作業には、講義受講

者である学部生の協力を得たことも忘れられない。

#### ◆講演会・シンポジウム

「観光研究プロジェクト」は講義だけでなく、講演会・シンポジウムを大学の内外で開催してきた。

まず二〇〇六年十一月一六日午後、東京大学の西村幸夫教授を招いて「歴史・文化・自然を活かしたまちづくりと観光」と題した講演会を二〇一教室で開催した。年末の寒い日にもかかわらず、一〇〇名近い参加者があった。有松をはじめとして、まちづくりに取り組んでいる人たちの参加も目立った。

西村教授は『都市保全計画』という千ページを超える大著を出版されるなど、都市計画、観光まちづくりの第一人者として活躍されている。ビジュアルな事例紹介など、時間を忘れさせるほどであった。「近き者悦びて遠き者来る」と観光まちづくりの神髄を述べ、講演を終えた。事例紹介の地域は、城崎温泉・湯布院・金沢・田主丸（久留米）・高山・越後村上・石見銀山である。研究プロジェクトの服部・吉田教授のコメント、会場からの多くの質問・発言に対しても、じつに丁寧に回答されたのが印象に残る。

西村講演から学んだことは多いが、

「観光まちづくり」について書いておきたい。観光まちづくりが観光施策として位置づけられるようになったのは、二〇〇〇年一二月の観光政策審議会答申「二十一世紀初頭における観光振興方策」からだ。その提唱者の一人が西村教授であり、講演の中で観光まちづくりを次のように定義した。

「地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業、人材など、地域のあらゆる資源を活かすことによって、交流を振興し、活力あるまちを実現するための活動である。また、地域社会と地域の資源と来訪者の三者がそれぞれ齟齬を来すことなく、サステイナビリティが保証されているまちづくりである。」

二〇〇七年一二月には、中区役所ホールで公開シンポジウム「名古屋の観光まちづくり」を開催した。名古屋市立大学と連携事業を進める日本政策投資銀行の共催によるもので、平日の昼間だったが三〇〇名近い参加者があり、準備した資料が底を突くほどであった。人間文化研究科長の司会のもと、本学理事と日本政策投資銀行東海支店長の挨拶から、シンポジウムは始まった。

基調講演は日本政策投資銀行の藻谷浩介氏である。年間四〇〇回の講演をこなす講師らしく、多くの統計



資料を巧みに使って、「クイズ」なども取り入れた手慣れた話であった。とりわけ人口減少時代の地域政策のあり方、観光まちづくりについての具体的な提言など、示唆に富む講演であった。

休憩後に、パネルディスカッションが行われた。パネリストは「名古屋と観光」の講師も務める須田寛先生、井澤知巨・スペーシア社長、別所眞三・名古屋市文化観光部長、本学の服部幸造教授、それに藻谷氏、コーディネータを私が担当した。パネリストからは、名古屋のまちづくりと観光に多くの課題が提起された。

名古屋のまちづくり、観光施策への辛口の「注文」と提案、参加者からの意見など、今後の調査研究に大いに役立った。メディアからの取材もあり、その後の「観光研究プロジェクト」に弾みをつける企画となった。さらに二〇〇八年一月一日に

は、国際シンポジウム「観光まちづくりの国際比較―ペーチ（ハンガリー）と名古屋から考える」を学部棟一階会議室で開催した。パブ・ノルベルト・ペーチ大学地理学研究所地中海東部・バルカン研究センター長が「ペーチ（ハンガリー）の観光政策とヨーロッパ文化首都二〇一〇」、鬼頭敏広・名古屋市文化観光部長が「名古屋の観光政策と実践」、私が「名古屋の観光まちづくり」と題して報告を行った。その後、鈴木広和・大阪大学准教授と本学の吉田一彦教授がコメントして、会場からの質疑に移った。歴史あるハンガリー・ペーチから学ぶことも多く、有意義な観光をめぐる国際シンポジウムとなった。

この国際シンポジウムの内容は、二〇〇九年三月に刊行された「文化的多元性の保存と発展に関するペーチ大学（ハンガリー）との共同研究」（研究代表者・山本明代・人間文化研究科教授）報告書の第一部「観光まちづくりの国際比較」として収録

されている。山本教授による「シンポジウムの趣旨」の一部を紹介する。研究の目的は、名古屋市とペーチ市に共通する文化的多元性に着目し、その保存と発展のために、両市において歴史的にいかなる施策が実践され、社会の仕組みが形成されてきたのか、それらの成果と問題点を説明することである。今年度は、両市において共通の課題となっている観光に焦点をあて、都市政策における観光の位置づけ、文化資源と観光の可能性・問題点について議論し、国際的な比較を行いたい。



ペーチ市は、E.U.が主導する「ヨーロッパ文化首都」の二〇一〇年の開催地として選ばれ、現在このイベントの開催に向けた準備が進められている。同時に、地域の歴史と文化の発掘・保存と都市の観光政策を結びつけ、「国境・境界なき都市」として、文化的多元性を有する地域文化を世界に発信している。このような試みを行っているペーチ市と観光施策に

産業・歴史・文化・環境を取り入れて、魅力的なまちづくりを行っている名古屋市の政策とを比較し、議論することは、学問的にも実践的にも有意義な機会となることだろう。

#### ◇「名古屋市観光戦略ビジョン」



公開シンポジウムや国際シンポジウムなどでは、名古屋市民経済局から講師を招いてきた。総合科目「名古屋と観光」でも、観光推進室や名古屋城総合事務所、名古屋市博物館などから講師を依頼している。学部講義科目「社会調査実習」において、名古屋の観光まちづくりをテーマに取りあげ、名古屋城総合事務所を協力のもとにアンケート調査などを実施し、報告書にまとめたこともある。

名古屋市との連携を強める中で、研究プロジェクト代表が「名古屋の観光推進を考える研究会」「名古屋市観光戦略研究会」座長を務め、名古屋市観光戦略ビジョンの策定など

にも関わることになった。名古屋市との連携は現在も続いている。こうした研究会の成果をもとにした名古屋市の観光戦略の一部を紹介してきた。

名古屋市は二〇〇八年に「観光アクションプラン」を策定した。名古屋の魅力を高め、訪れたくなるまちを実現し、都市の活性化をめざす。そのため①観光資源の活用、②観光プロモーションの推進、③ホスピタリティの醸成、④広域観光推進、という基本的視点を踏まえ、本プランに掲げる事業を全庁で取り組むとした。とりわけ「全庁で取り組む」という七文字が目ざされ、市役所の各部署が一丸となって観光施策に関わることになった。

名古屋市はこの「観光アクションプラン」を踏まえ、一〇年先を見越した観光戦略ビジョンを策定するために、名古屋市観光戦略研究会を設置した。この研究会には市の関連部署からも参加があり、観光施策に「全庁で取り組む」という姿勢が見受けられた。研究会座長として、観光まちづくりの視点を強調した。研究会「提言」にも次のように記されている。住む人が誇れ、旅行者が何度でも来なくなる「まち」に向けた取り組み、観光まちづくりにより、大都市名古屋の魅力と活力をアップさせ

る。地域が一体となった観光まちづくりを推進して、「住んでよし、訪れてよし」の名古屋を官民一体、市民との協働の取り組みにより実現する。

二〇一〇年一二月策定の名古屋市観光戦略ビジョンは、基本理念を「飛躍する名古屋の観光」世界的な交流拠点都市をめざして」として、その実現に向けた第一の視点に名古屋らしい魅力の創出をあげる。そのなかで「歴史観光」と「都市観光」の推進を今後一〇年間の重点的な取り組みとして掲げる。「歴史観光」については、翌年に策定された「名古屋歴史まちづくり戦略」のなかで、より具体的に展開される。

#### ◇『名古屋の観光力』刊行



七年余りにわたる研究・教育の成果として、二〇一三年九月に『名古屋の観光力―歴史・文化・まちづくりからのまなざし』を刊行した。講義担当者だけでなく、学部・大学院

の学生・修了生も執筆に加わった。「はじめに」の最後に次のように記してある。

本書は「観光のまなざし」を名古屋に於てる。まなざしの焦点は、名古屋の観光力である。名古屋の観光力の現実をシビアにみつめ、名古屋ならではの観光戦略をさぐる。「名古屋の歴史・文化・まちづくり」の共同研究と講義をもとに、名古屋の観光を勘考していきたい。まずは名古屋の歴史から、観光の旅をはじめよう。

本書はパート一「名古屋の歴史・文化と観光」、パート二「名古屋のまちづくりと観光」から構成される。一は「大須・名古屋城・熱田神宮―名古屋の歴史文化遺産と観光」「名古屋は『芸どころ』か?!」「名古屋の文学―俳人・馬場駿吉の見た名古屋」「名古屋のことば」二は「名古屋の観光まちづくり」「名古屋城の本丸御殿復元を考える―熊本城の復元を参照して」「絵葉書からさぐる(近代名古屋)の観光」「名古屋の歴史・文化・まちづくりと観光」と大須文庫・河村文庫・熱田神宮・名古屋めし・名古屋市博物館のコラムからなる。

編者の一人である吉田一彦教授は、「名古屋に少しの観光を」として、観光活性化の意味を三つあげる。一

つは、経済の問題である。名古屋の経済の中に、ものづくりだけでなく、観光という側面を加えておけば、緩衝材、安全弁としての重要な役割を果たしてくれる。名古屋の経済を観光中心のものに一八〇度転換するというのは非現実的だと思うが、ものづくり経済一辺倒ではなく、ものづくりを重視しつつもそれに観光を加えていくことは有益なことだろう。

第二は、地域の歴史、文化の自己理解の問題である。名古屋には名古屋の歴史、文化がある。それを名古屋の人々が深く、またその長所、短所を含めて愛着をもって認識することは重要な課題の一つとなるだろう。そのために、学校教育にゆだねるだけでは必ずしも十分な成果は得られないのではないか。地域の歴史、文化の理解には、もっと生活に密着するようにして、感性的な肌身で体感するという側面が欠かせないからである。観光の活性化はその一つの誘因になりうるものであり、地域の人々の歴史、文化の自己理解の深化に大いに寄与すると考える。

第三は、国内外の人々との交流の推進と発信力の向上の問題である。名古屋と他地域、他国家の人々との交流は、現在ある程度進展しているとはいえ、まだ足りない。交流を今以上に推進していく必要があるし、

その中で名古屋についての情報や魅力を広く外部に発信していくことが大事な課題になっている。何らかの方法論の準備なしには交流の活性化はなかなか成し遂げられない。その推進には仕掛けが必要だと思いが、観光の活性化はその一つになりうる。と考える。

本書は名古屋のまちづくりや観光に関心のある多くの人に読まれ、「名古屋と観光」の講義テキストとしても活用してきた。研究所マンデーサロンなどでも報告会を行った。刊行まもなくして、「中部経済新聞」に本書の紹介を中心とした書評が出たが、その後『東海社会学会年報』第七号、二〇一五年六月に、詳しい書評が掲載された。

評者は学会理事の岡村徹也氏であり、五ページにわたる長めの書評の中で、八本の論考を丁寧に紹介する。そして「読者はこれらの論考から、名古屋にはいかに多くの歴史文化遺産があるのか、そして歴史文化遺産を中心としたネットワーク化と住民参加が、名古屋の観光力を高める鍵であることを理解できるであろう」と述べる。

「编者」である山田明は本書のなかでアーリの『観光のまなざし』における諸概念を手がかりにして名古屋の観光に注目しているが、評者も

アーリに引きつけて本書の議論を整理してみたい」とする。示唆に富むので、最後のところを紹介しておくたい。

「アーリの『観光のまなざし』の議論にしたがえば、まなざしが集中するということとは多くの人が訪れるということである。それは名古屋によってしつらえられた空間がその構成において観光者を意識し、テーマに沿って人を呼び込む努力をあらかじめ含んでいることを意味する。現在の名古屋の観光に関して言えば、名古屋城の整備をはじめ、さまざまに手を尽くしている。

しかしながら、観光者はそうした『表象空間としての名古屋の良き理解者』とはなっていないのが現状である。アーリは観光における『教養』と『娯楽』の関係にも注目している。アーリ自身は『教養観光』の発展を示唆するにとどまっているが、『名古屋の観光力』は、名古屋には観光都市と呼ぶにふさわしい観光資源が豊富にあること、すぐれた歴史文化資産があることを認識し、名古屋の観光がそれら資源を用いてある種の『教養観光』へと発展するための、そして観光者を『表象空間としての名古屋の良き理解者』へと変えていくための具体的な方策を考えるための一助となるであろう。」

#### ◇名古屋のまちづくりと都市魅力

退職後は当然ながら、学生よりも市民向けに話す機会が多くなった。一昨年、名古屋市青年大学、鯉城学園専門講座で「名古屋のまちづくりと都市魅力」をテーマにして講義している。また昨年五月には、不動産協会中部支部例会で「名古屋のまちづくりとアメニティ」というテーマで話した。現役時代の「名古屋と観光」などの講義をベースにして、その後の「成果」を盛り込んで内容を変化させている。講義のポイントは次のようだ。

グローバル時代にあつて、コミュニティや地域、まちづくりに関心をもつ、若い世代の「ローカル志向」が注目されている。佐藤滋早大教授は、「町」や「街」でもない、ひらがなの「まちづくり」を次のように定義している。「地域社会に存在する資源を基礎として、多様な主体が連携・協力して、身近な居住環境を漸進的に改善し、まちの活力と魅力を高め、『生活の質の向上』を実現するための一連の持続的な活動である。」

まちづくりのなかでも、名古屋の観光まちづくりに注目してきた。西村幸夫東大教授は、「もともと『まちづくり』と『観光』とは向いてい

るベクトルの向きがまったく異なる。地域社会・地域環境・地域経済との関わりはなかく、まちづくりと観光は接点をもつようになってきた。」

「アメニティ」という言葉は日本語に訳しにくいのが、快適さ、心地よさなどを表わす。宮本憲一『環境経済学』新版によれば「アメニティとは、市場価格では評価できないものをふくむ生活環境であり、自然、歴史的文化財、街並み、風景、地域文化、コミュニティの連帯、人情、地域的公共サービス（教育、医療、福祉、犯罪防止など）、交通の便利さなどを内容としている。」

近代大阪の骨格をつくった関一大阪市長のいう「住み心地よき都市」が、日本でアメニティを最初に提唱した都市政策といえる。大阪の御堂筋や中之島界限などは、都市景観に優れ、風格のある街並みを形成している。人間に人格があるように、都市にも「都市格」があると言われる。関一市長時代の大阪から、最近は様変わりして、大阪のアメニティが急速に失われてきている。

では、名古屋のアメニティ、「都市格」はどう評価できるだろうか。名古屋は概して住みやすいと言われるが、まちの魅力の評価は芳しくない。「あまりぱっとしない都市名古屋」といったところか。各種アン

ケートの調査結果などから、名古屋の個性と魅力を探っていききたい。名古屋市次期総合計画に関するアンケート調査結果報告書、二〇一四年三月によると、都市の個性や魅力について、「あなたは、名古屋は若い世代が訪れたいと思う魅力的なまちだと感じますか」という問いに対して、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」という回答が半数あった。その理由として、七割近くの人が「訪れたい魅力的な場所が少ない」と答えている。こうした結果をどう考えるか。

名古屋のまちづくりは、「清洲越し」による城下町建設から始まる。今から四〇〇年余り前のことで、現代風に言えば、城下町の「高台移転」だ。名古屋城と熱田神宮、広小路から本町通り、大須など現代に至る街並みが形成された。明治から大正へと時代が進み、工業が発展して人口も増えていった。昭和に入り「百万都市」となり、全国有数の軍需工業都市に発展する。

戦時下の徹底した空襲により、地域の四分の一余りが焼失する。とりわけ市中心部は焼け野原となり、街並みは一変し、貴重な歴史的遺産もなくなつた。戦後ただちに焦土からの復興、全国有数の戦災復興事業が行われる。土地区画整理を主体とし

たまちづくりにより、「青年都市」名古屋の街並みが形成されていった。伊勢湾台風を経て、高度成長の時代に市街地開発が進む。その後、経済優先のたまちづくりを反省し、「ゆとりとうるおいのあるまちづくり」が展開されていく。

こうした名古屋のたまちづくりの歴史について、地図や映像を使って話す。とりわけ「名古屋百年」の映像に注目が集まる。最後に、『景観が語る名古屋』名古屋都市センター、一九九九年の「都市名古屋の一世紀」の一節を紹介する。

慶長の城下町建設から明治維新、そして戦災復興を経た都市名古屋の足跡は、都市計画と実践の歴史であったが、同時にそれは、古いものを壊し、新しいものを建設するという開発の論理によって押し進められてきたことを意味している。古い建造物を手掛かりに定点観測を試みたこの写真集の制作過程で気付いたことは、新しさと引き換えに私たちは界限への愛着や記憶の拠り所を失おうとしている現実だった。成熟した都市には、時間や記憶が可視化されたモノユメントがもつと欲しいというものが率直な印象である。守る景観と作る景観のバランスとコントラストが、都市をいっそう魅力的に輝かせるにちがいない。

## ◇戦後七〇年と名古屋

二〇一五年は戦後七〇年にあたる。八月に地元ケーブルテレビ（西三河をエリアとするキャッチネットワーク）で「戦後七〇年 未来へ生きる私たちへ」という特別番組制作に関わった。テレビ局で働く卒業生からの依頼によるものだ。戦争体験者の声を集め、戦争遺構を発掘し、映像遺産として残すもので、地域メディアならではの取材力を活かした番組だ。

その際、「時間軸」と「地域軸」という二つの軸から、戦後七〇年を振り返り、未来を展望できないかと提案した。タテとヨコの軸により、地域の発展と課題を検証するもの。お盆に放送されたあと（大みそかにも再放送）、視聴者から分かりやすかったという声が寄せられたという。ここでは、先の書評の「表象空間としての名古屋の良き理解者」という言葉と関連づけて、戦後七〇年の名古屋を戦災から振り返ってみよう。

『名古屋の観光力』の担当章で次のように書いた。「名古屋が都市としての個性と魅力に欠けるのは、戦争により歴史的遺産と景観が豊富な市街地の大半が焼失したことが大きく影響している。それと戦後の戦災復興事業により、機能的・効率的なま

ちづくりが推進されてきたことによる。」戦後七〇年という節目でもあり、名古屋の戦災、「まちこわし」の実態を二つの資料から見ていきたい。

戦後名古屋のまちづくりにとって、その出発点が戦災であり、その後の戦災復興事業である。「昭和二二年名古屋市戦災焼失区域図」は、昭和二〇年（一九四五）の終戦時点に作成されたもので、戦災の実態をビジュアルに伝える。名古屋都市センター編『名古屋都市計画史（大正八年～昭和四四年）図集編』に収録されている。

解説によると、名古屋市が受けた空襲は昭和一九年一月から二〇年七月の間に計三八回におよび、そのうち機数四〇機以上の大空襲は一六回を数えた。これらの空襲により、全市域約一万六〇〇〇haの約二四％にあたる約三八五〇haが灰燼に帰し、特に東・中・栄・熱田の各区は、その区域の五〇～六〇％が焼失した。

本格的な空襲は、東区にあった三菱発動機工場に対するB二九爆撃機七〇機による爆撃であった。その後の地域爆撃は、主として焼夷弾により夜間空襲という形で行われ、都心の公共建物や繁華街は壊滅的な打撃を受け、市の中心部は焦土と化した。

た。

もう一つは、『新修名古屋市史料編近代三』に収録されている「米國戦略爆撃調査団資料」（原資料は米國国立公文書館、英文）である。昭和二〇年三月一二日の名古屋市街空襲の直前（三月九日）に、搭乗員などに爆撃目標についての情報を周知させるために作成されたと推測される資料の一部を紹介したい。

名古屋の「目標地域」と定められた地域は、東と南東を中央線で区切られた三角形をした中心の核となる部分である。東海道本線は目標地域の西と南西部分を形づくっている。広大にして著名な名古屋城は目標地域の主要部分の北端に位置する。城と東海道線に挟まれた部分は、かなり建て込んだ地域で、攻撃対象の北の張り出し部分である。目標地域の大体の規模は端から端までおよそ三マイルである。

この地域は名古屋のなかでも焼夷弾攻撃に対して最も脆弱な地域であり、人口密度も最高で、名古屋全体では一平方マイル当たり二万二〇〇〇人であるのに対して、七万五〇〇〇人に及んでいる。このゾーンは都心の商業地域及び市政の中枢部を含んでいる。またこのゾーンは、レンガ造りや石造りの背の高い公共建築物や、概して近代的な耐

火構造をもつ大きな百貨店、事務所、銀行、その他の事業所などが集中している地区として特徴づけられるが、これらの建物のまわりには燃え易い密集した家屋の群れがひしめいている。このゾーンの南の部分には、とくに運河の堤に沿って数多くの小さな工場が点在している。

「表象空間としての名古屋」を理解するうえで、こうした時間軸と空間軸から見た戦後七〇年、とりわけ戦災は大きな位置を占めるであろう。戦前と戦後の名古屋を連続的に理解するうえで、戦災が名古屋のまちにどのような影響をおよぼしたかに注目していきたい。

こうして人間文化研究所の共同研究プロジェクトとして観光研究を進めてきたが、二〇一四年からは新たな歩みを始めつつある。これからの期待したい。